

～輝きの子育て～

読 解 力 (大切にしたい日本語)

2022年も早や一ヶ月が過ぎようとしています。

新型コロナ感染も、オミクロン株の登場で、瞬く間に蔓延防止等重点措置の発動になりました。
冬季オリンピックは中国が始まります。中国といえばウイグル族の全滅を目指しているようです。
ウイグル族からウイグル語を奪い、漢民族との同化を進めているとの報道があります。
民族からその民族の国語をなくせば国は滅びます。祖国とは、国語だと言ってもよいと思います。
私達は日本語を通じて、読解力、考える力、語彙力、文章力を身につけます。
その日本人の読解力が今落ちています。

2019年に公表されたOECD（経済協力開発機構）の国際的な学習到達度調査（PISA）で、日本の読解力は前回の8位から15位に大きく順位を落しました。因みに、科学的応用力は5位、数学的応用力は6位と順位の変動はありませんでした。

読解力の低下に比例して日本の存在感（日本の国力）も低下しているように感じてしまいます。国語力の低下は極めて深刻であり、国を地盤沈下させる重大な要因となり、このまま放置すれば日本は沈没すると明治大学文学部教授の齋藤孝氏は警鐘をならしています。

読解力低下の要因の一つに、読書をしない若い世代が増えていることがあります。一日の読書時間がゼロの大学生は、最近の調査で47%になっています。

国の教育指導方針が将来の読解力低下にも影響を及ぼすものと考えられます。

高校の話ですが、来年度から国語の教科書から小説や評論文を減らし、契約書や自治体からの通知などの実用文を取り入れることとなりました。実用文は大切ですが、小説による、感情や情景描写といった表現の豊かさを読み取る読解力は低下していくと思います。

又、幼児教育における英語の重視は、結果として日本語を軽視する風潮になることも問題です。

英語力を身に付ければ、言葉の壁を越えて様々な国の人と交流でき、子どもの将来は大きく広がっていくでしょう。しかし習得の順番は母国語である日本語です。日本語を高いレベルで身に付け、自在な思考、自在な表現が可能になれば一生の武器となります。そして、その内容を英語で話すことができれば国際的に通用する人間になります。

御茶ノ水女子大学の名誉教授、藤原正彦氏は海外での研究生生活の長い数学者ですが、「一に国語、二に国語、三、四がなくて五に算数」と国語教育の重要性を説いています。

森信三氏（教育者1896年～1992年）は「修身教授録」の中で読書は「心の養分」と言っています。肉体を養う「肉体の養分」は食事です。一日として欠かす事はできません。「心の養分」としての読書は、一日欠けようが、一週間欠けようが生きていけます。それでも「一日読まざれば一日衰える」のです。一般に偉人と言われる人、事業で成功している人は大いなる読書家です。

読書習慣があり、自宅に沢山の本がある家庭の子どもは将来大きく伸びるという研究があるそうです。

本に親しむ習慣、時に子供と音読をする家族になりましょう。

因みに、本といっても電子書籍、マンガ、写真集、料理本も本の範疇に入ると考えています。

片野 英司



参考 ・ 齋藤孝氏の「小学国語教科書」発刊にける思いの宣伝文
（1月25日刊行予定 分厚い本のようにです）
・ 読書時間 2020年の学生生活実態調査
（全国学生協同組合連合会）